

英語ディベートという競技と筑波 ESS の文化

塗木 健二

松本(1996)は、ディベートを「ひとつの論題に対し、2 チームの話し手が肯定する立場と否定する立場に分かれ、自分たちの議論の優位性を聞き手 (ジャッジ) に理解してもらうことを意図したうえで、客観的な証拠資料に基づいて議論をするコミュニケーション形態である」と定義している。先行研究では、ディベートを行うことによって「批判的思考力」や「論理的思考力」が身につくことが分かっており、実際に教育現場においてディベートを採用する機会が増えてきている。本研究では、英語の競技ディベートを行っている筑波大学のサークル (筑波 ESS) に対して、参与観察と半構造化インタビューの手法を用いて質的調査を行った。これまで、教育現場でディベートを用いた授業を行い、生徒の様子から分析や質問紙調査を行ったものは存在するが、普段から競技ディベートを行っているコミュニティに対しての質的な研究は、なされていない。対象者が継続的にディベートを行うことでどのような価値観が身についてきたと捉えているのかという点は明らかにされておらず、その点について明らかにすることが、本研究における新規性であると言える。前述した点やそのコミュニティ内において、どのような文化が育まれているのかという点について明らかにすることで、先行研究では明らかにされていない、競技ディベートに取り組む重要性やその日常からかけ離れた「競技」としてのコミュニケーションの形について明らかにすることが本研究の目的である。そして今まで競技ディベートにほとんど取り組んだ経験のない新入生が、筑波 ESS というコミュニティ参加するということによってどのように変化していくのか、という点について触れていきたい。

本研究では、以下のことが明らかになった。(1)競技ディベートに今までほとんど触れてこなかった新入生が、筑波 ESS で活動を続けていくうちに「ディベート用語」を覚え、それを日常会話の中でも用いるように変化していくことが分かった。そして競技ディベートを続け、反論や反駁を考えることが当たり前になるうちに、日常生活においても「引かない態度」が身についていくことが分かった。(2)筑波 ESS で行う競技ディベートでは、ディベートというものをコミュニケーションではなく、競技であると捉えるため、最も重要視されることは「勝つ」という点になることが分かった。彼らは、ディベートに対してコミュニケーションを行っているというよりも、競技を行っているという態度に近く、さらに論題に対して議論の深掘りを常日頃から行い続けるので、ディベートに日常を侵食されてしまうような場面も伺い知ることができた。(3)ディベートの試合において、主張を伝えたい相手と、実際にコミュニケーションを行う相手が異なるディベートのコミュニケーション形態は、日常のそれと似ているようで、全く別物であることが分かった。

(指導教員 照山絢子)